

言語能力の高い自閉症スペクトラム児の

社会的相互交渉の発達過程の研究

- プレイセラピーにおける子ども同士の会話分析から -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
丸山 千恵子

本研究では、言語能力の高い自閉症スペクトラム児の社会的相互交渉の発達過程を明らかにするため、プレイセラピーにおける他児への発話を、Bales(1971)の“社会的な相互作用過程のカテゴリー”を用いて分析した。分析には2年1ヶ月分のデータを使用した。

まず、プレイセラピーにおける遊びの変化から、2年1ヶ月間を3つの時期に区分した。

次に、対象児(以下X児)が他児(以下Y児)に向かって発話したものを全て取り出し、その中から“会話につながった発話”と、“会話につながらなかった発話”に分類した。さらにその発話を、情報伝達と社会的相互交渉とに分け、それぞれBalesのカテゴリーに沿って、分類を行った。そして時期ごとに量的・質的な分析を加えた。その結果、時期ごとの特徴が明らかになった。

まず第一期は、X児からY児の関わりが少なく、Y児からの関わりがあったとしても否定的な言語行動が多かった。この時期は、Y児の関わりを受けるか受けないかという“自己の中での選択”を行っていた時期であったといえる。次に第二期は、情報交換が多い時期であり、特にY児の意図を聞いたり、自身の意図を伝えたりする“自他の意図の交換と対比”が目立った時期であった。第一期から第二期に移行する際、Y児の意図が自身の意図と違うことに気づく姿があり、それがもとになって他者の意図を知ろうという姿となって表れたことが推測できる。また、自他の意図の交換が進むにつれ、Y児に対しての肯定的な社会的相互交渉が増加していった。そして第三期には、2人の関係が良好になり、Y児への共感やY児の意図にもとづく自己の意図の調整が観察される。第三期において明らかになった意図の相違を解消するための言語行動が観察され、“自他の相反する意図の統合”が行われた時期であった。

以上の変化より、X児がY児への社会的相互交渉を否定から肯定へ変化させていった背景には、自他の意図を交換し、他者理解を深めていったからであることが推測された。またそのためには、自他の意図を闘わせる場面も必要であり、意図の食い違いや、関係がもつれる場面が長期的な経過の中では必要なことが示された。特に他者に拒否的・敵対的な関わりをする自閉症児は、トラブルを防ごうとする大人の介入によって、他者の意図理解の機会が十分与えられないままになりがちであるが、今回の結果から、大人が適切な介入を行うことによって、自閉症児自身が社会的相互交渉を変化させる可能性があることを示すことができたと考えられる。